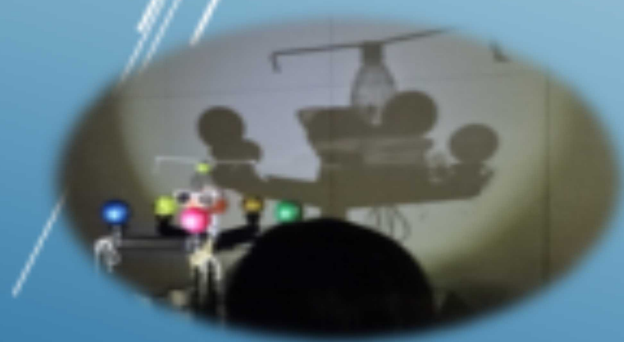


IV 成果と課題



成果と課題

○成果

Ⅰ 育成する資質・能力を明確にした指導計画の工夫

① 実態を把握し、何度も繰り返す

日常生活や普段の他教科での学習・図画工作科でのこれまでの活動の様子などから、児童の実態を把握し、児童が造形的な見方・考え方を働かせて活動できるように工夫したり、色や形などについて気付いたことを話し合う活動を繰り返したりする中でどの児童も生き生きと表現する様子が見られるようになった。

1年生では就学前に育まれてきた力を念頭に置いてねらいを設定し、遊び心を大切にしながら学習活動の計画を立てた。その結果、意欲をもって生き生きと活動を継続することができた。さらに今までの経験を生かしながら、造形的な見方・考え方を広げ、表現する喜びを味わうことができ、これからの造形活動への意欲へつながっていった。

2年生では、自分がつくるものに自信をもてない児童がいたが、友達と作品のよさを伝え合ったり認め合ったりすることを繰り返すことで、次第に自信をもって活動する姿が見られるようになった。

4年生では、自分の表現に自信がもてなかったり自己決定が苦手だったりして途中であきらめてしまう児童もいたが、様々な材料を試したり組み合わせ方を工夫したりする学習を繰り返し行うことにより、自分らしく表現しようとする児童が増えてきた。

5年生では、自分たちが撮った写真を互いに鑑賞する際、色や形、何かに見立てた題名などについて、注目してほしい作品を例にあげて学級全体で話し合う時間を設けた。その結果写真を撮ったり、見たりするときの見方や考え方を身に付けることができ、その後友達どうして何度も行った鑑賞の際にも、造形的な見方、考え方を広げながら、友達の作品を鑑賞することができた。

② ゴールを意識させることで目的意識を明確にする

児童にとって興味のある題材を設定し、「何のために」「何を」「どのようにして」つくのかをはっきりさせることで、造形的な見方・考え方を働かせて、自分の表したいことや表し方について考え、意欲的に取り組む様子が見られた。

1年生では、色水展覧会を上級生に紹介することを最終ゴールに設定したことで、憧れる上級生から賞賛してほしいという思いをもって、張り切って取り組む様子が見られた。友達と相談したりつくりかえたりしながら、自分の思う色を作り出したり並べかえたり何度も繰り返し意欲的に活動した。

3年生では、世界に一つだけの自分の筆をつくることをゴールに設定することで、少しでも自分の気に入るものをつくりたいという気持ちが生まれ、試行錯誤しながら粘り強く取り組む様子が見られた。

6年生では、こんな新製品があったらいいなと思うものを全体で出し合い、企画の説明から中間発表、完成品の発表会まで同じ班で行うことを伝えて活動を行った。自他のゴールを共有し、そのゴールに向けてアイデアを出し合いながら活動を進めるようにした。他者に説明したりアドバイスをもらったりすることで、自分の表現のねらいを再確認し、イメージしているゴ

ールに近づいているかをふり返りながら活動を進めることができた。

③ 技能の系統性や発達段階を考え年間指導計画を作成する

少しずつ形を変化させ、関連する題材を配列し何度も取り組むことで、育成したい力の向上が見られた。

1年生では、「おきにいりのいしをみつけよう」の後に「○○ちゃん（おきにいりのいし）のおうちをつくろう」を設定したり、「すきまちゃんのすきなすきま」の後に「すきまちゃんといっしょにせんのぼうけんへレッツゴー！」を設定したりすることにより、自分と対象とを一体的に捉える発達段階に合わせて、より豊かな造形活動を生み出していけるように計画した。

6年生では、鑑賞の活動を1年間を通して繰り返し行った。最初はその作品を見て分かることや考えたことについて学級で伝え合った。次は作者が作品を通して伝えなかったこと、作者の意図について考え、伝え合った。鑑賞活動を繰り返し行いながら少しずつレベルアップし、自分たちの作品を製作したり鑑賞したりするときに、生かすようにした。

2 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

① 場の設定、用具の準備

児童の興味や関心、発見が得られるような場の設定の工夫、用具の準備、材料の精選を行うことで、児童が主体的に活動する児童の様子が見られた。

1年生の「めざせ！カラフルいろ水はかせ」では、活動場所を「いろ水けんきゅうしつ」と表示し、児童が博士をめざして色水をつくっていく、という設定で授業を展開した。児童は早くしたいという意欲をもち、楽しみながら活動を続けることができた。

2年生の「ぶくぶくあわあわ なにに見えた？」では、泡をつくる時に使うストローを長くすることで安全性を高めるとともに、一人では扱いづらい状況にすることで、必然的に近くの友達と協力したり話したりしながら進めていく様子が見られた。

3年生の「これでかきたい～せかいに一つだけのふで～」では、教室の真ん中に枝をおくことで、初めて枝に触れるときに自然と友達と感覚を共有し、会話しながらイメージを広げる様子が見られた。またつくった筆のかきごちを実際にためすために、教室の真ん中やろうかの壁などに大きな紙を用意した。自然と友達の様子が目に入ったり会話が生まれたりできることを念頭に置いて設置し、児童は自分の活動に意欲的に取り組むことができた。

4年生の「不思議なかげの実験室」では、導入の際には身近にあるものを材料として提示し、その後の授業で大きさや色、透明度の異なる材料を提示することによって、意欲的に取り組む様子が見られた。また、材料を置く場所を中央に配置し、互いの活動が自然に目に入るようにした。友達の様子に刺激を受けたり自然な交流が生まれたりして、発想が広がった。

② 交流

よく似た考えで活動をしている児童どうして話す、異なる考えの児童と話す等、意見を交流する場を設定し、造形的な視点から対話を繰り返すことで、自分や友達の方法や作品について、よさや新たな考え方に気付くことができた。

1年生では近くの友達と話しながら色水づくりをすることで、発想や構想を繰り返し、新しい色を見つけたり工夫して並べたりと、何度もつくりかえながら取り組むことができた。また、

展覧会で他の学年の児童に自分の作品を見てもらおう際には、自分の見方や感じ方を伝えたり上級生に共感してもらったりして、喜びを感じると共に、さらに見方や考え方を広げることができた。

2年生では活動前に学級全体で前時の活動についてふり返り、前時につくった形やもようについて気付いたことや感じたことを伝え合う時間をとった。感じたことを学級全体で伝え合うことで、見方や考え方が広がり、各自が発想豊かに造形活動に取り組むことができた。

6年生では同じ班のメンバーと発想段階や製作途中などで自分の考えや互いの意見を交流することで、新たなひらめきを生み出したり、作品に対する自分なりの意味や価値を再構築したりすることができた。

③ 自分らしさ

自分の方法や作品に自信がもてなかったときに友達から賞賛を受けたり、思い通りに進まないとき「こんなふうにしたい」という自分の思いを友達に説明したり話し合ったり友達からアドバイスをもらったりする、という場面等を通して自分らしさを大切に思う気持ちが育ち、学びの深まりが見られた。

5年生では、自分が撮った写真を友達と見せ合ったり、いいなと思ったことを伝え合うことで、自分の写真のよさや面白さを新たに発見することができ、自分の作品に自信をもてるようになり大切に思う様子が見られた。

6年生では、お互いに作品を見せ合い、説明し合いながらつくりあげていくことで、「見てもらいたい」「よりよいものをつくりたい」という意欲の高まりが見られたとともに、自分や友達のよさや個性などに気付き、作品に対する思いを強めることができた。

3 指導と評価の一体化の工夫

① めあてとふり返りの記録

どの学年も学習中の各時間や単元の最初と最後にそれぞれめあてと振り返りを自分で記録しておくことで、いつでも自分の状態を確認することができ、めあてに向かって学習活動を進めることができた。

② ためす

初めてのことに抵抗がある児童、色やかたちづくりに苦手意識がある児童、自分の思いを伝えられない児童など自信をもてなくて活動を進められない児童に、本番ではない「ためす」場を設定することで、こんな方法ですればいい、これならいけそうだな、こんな時はこうする等のイメージをもたせることができ、スムーズに学習活動に取り組むことができた。

2年生では、本番用の大きな紙にかき入れる前に、他の用紙に泡の模様づくりを何度も試してみた。何度でも、自由に試すことで、自分なりのやり方や工夫を見つけられたり、安心して取り組めたりした。

3年生では、自分のつくっている筆のかきごちを試して、枝ぶりや材料など何をどのように使いたいのか、自分で試行錯誤しながらつくりかえている様子が見られた。

③ 気付きや工夫の共有

一人のつぶやき、一人の悩み、工夫等を全体で共有することで、別の視点からの新たなよさ、価値に気付いたり、新たな方法や工夫などについての意見が出されたりして、次にどのように進めていくことができるかのヒントとなったり、行き詰まっている児童の手立てとなったりした。

1年生では、児童がつくった色水に「どうやってつくったの。」という声かけをして気付きやイメージを引き出したり、友達の色水との比較を促す声かけを行ったりすることで、色彩感覚が豊かになった。

3年生では筆をつくる際に枝を接着させることが難しく、悩んでいる児童が多くいたため、うまく接着することのできた児童からその方法を聞く等、全体で、児童が意見を出し合い共有したことを、各自の活動に生かすことができた。

4年生では、面白い影をつくった児童の工夫や、偶然できた影の面白さに気付いた児童の意見を全体に紹介し、活動意欲を高めることができた。

5年生では、自分や友達が撮った写真を学級全体で見せ合うことで、写真を撮る角度や大きさなどによって効果が違うことに気付き、自分の活動に生かすことができた。

④ 価値付け

教師が児童のめざす姿を設定し、その姿を意識しながら児童の活動を価値付けるようにした。特に自分の技能や作品にあまり自信がない児童への教師の声かけや、児童個人の発想や活動中の工夫などを学級全体に教師が伝えることで得られる友達からの反応などによって、一人一人が自信をもって取り組むことができた。

1年生では、つくった色水、容器、並べ方などについて教師が「いいね」「すてきだね」と声をかけることで、自信が深まり、活動意欲を高めることができた。また異学年からの価値付けにより、自分のよさや可能性を再確認し、創造することに喜びを感じることもできた。

5年生では撮った写真を友達と見せ合い、どんなところがいいのか伝え合うことで、自分の写真に自信をもち、次の写真を撮る際の意欲にもつながった。

6年生では、鑑賞の学習でそれぞれが気になる部分について自分の考えを発表する際、人と考えが異なることに不安そうな児童もいたが、人によって感じ方が違うことは当然でいろいろな考えがあることが正解だと伝えることで、児童が自信をもって自分の考えたことを発表することができた。

⑤ 教師の見取り

実際の活動中に十分見取れなかった様子をタブレットの記録やワークシートで授業後に確認し、どのような手立てや声かけが必要かを考え、次時の授業に生かすことができた。

1年生では、児童が自分で撮った写真とふり返りを授業後に見返すことで、児童一人一人の活動過程での思考を見取り、次時の初めにどのように児童に問いを投げかけたらよいのか、何を意識させればよいのか等の指導に生かすことができた。

4年生では、児童の活動場所を活動配置図に記入したり、教師が気になる場面を写真に残したりすることで、活動の様子を見取り、その後の指導に生かすことができた。

4 ICTの効果的な活用

① 自分の記録を自分自身で

写真に撮るなど記録を残していくことで、自分でいつでも振り返ることができ、自分自身の進め方の様子を確認することができた。

3年生では、児童用タブレットを用いて自分の最初の構想をかきこみ、活動中や活動後にも思いついたことをかきためたりかきかえたりすることで、自分の考えの変化を自分自身で知ることができた。さらに、毎時間の活動後に本時のふり返りと次の活動のめあてを書くことで、次に自分が何をしたいのかははっきりし、めあてからそれず自分の課題をもってスムーズに活動を始めることができた。

② 互いに鑑賞し、伝え合う

制作途中のものや完成した作品について、児童や教師が作品を写真に撮って互いに感想を伝え合うことで、造形的な見方や考え方が広がったり深まったりした。

4年生では、「自分が気に入った影を撮影して、自分の気付きを書き込み記録する」「それを見た児童が気付いたことを書き込む」という繰り返して、意見交換が活発になり、形や色を意識したものの見方が育ってきた。

5年生では児童用タブレットで全員の作品を自由に見て感じたことを書き込み、全体での話し合いでは、その作品を大型テレビに映してその箇所を示しながら説明した。手元で自分で確認し、大きく写して全体で共有することで、自分が気付かなかった見方や考え方を知ることができた。

③ イメージをつかむ（発想・構想・色など）

初めてのことに取り組みにくい児童や活動に苦手意識のある児童も、「どんな感じ」「こんなふうにするといい」「失敗してもすぐにやり直せる」等、実際にやってみることで、実際の活動に取り組みやすくなった。

2年生では絵に想像したことをかき入れる際にタブレットを使用した。友達の書き込みの様子を互いに見合い、イメージを広げることができた。また思い通りにならなければすぐにやり直すこともできる。自分の思いを整理し、次の活動の具体的なイメージをもつことができた。

④ 様々な角度から

決まった向きからだけではなく、様々な角度から見た様子を共有することで、ものの見方や感じ方を広げることができた。

4年生では見つけた面白い形を、気に入った角度から撮影し、友達と見せ合うことで、新たな見方に気付くきっかけとなった。また、自分が着目した点も書き込むことで、意見交換も活発になった。

5年生では、同じものを様々な角度から、アップとルーズを工夫して撮影したものを見せ合うことで、写真から受けるイメージや見え方が全然違うことに気づき、見方や感じ方を広げることができた。

⑤ 記録を指導に生かす

児童がタブレットを使って自分で撮った作品と書き込んだふり返りを同時に見ることで、教師が児童の思いをより詳しく見取ることができた。

どの学年でも学習の初めに児童のふり返りを紹介したり、前時の活動の様子を大型テレビで見せて前時の学習を想起させたりして、本時の意欲をもたせることができた。

また、教師が授業風景を記録し、見返すことで児童の活動の様子や支援の在り方を検討し、授業改善に生かした。

○課題

1 育成する資質・能力を明確にした指導計画の工夫

繰り返し行う学習の頻度によって、身に付く力にばらつきが出てくるので、6年間を見通して、バランスよく計画していく必要がある。

2 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

友達の意見を聞くことや、感じたことや考えたことをうまく伝えられないことによって、他者との交流を自分の活動に生かすことができない児童がいた。イメージや感じたことなどを言語化する等、図工科だけでなく全ての生活の場面において、言葉でのやりとりを大切にしていきたい。

児童の興味・関心がめあてから外れてしまわないよう、材料等の提示のタイミングや、意識付けのしかたについて考えることが必要である。

また、場の設定や材料などについても、より吟味する必要がある。

3 指導と評価の一体化の工夫

割合としては減ってきたが、思い通りに進められないときに粘り強く取り組めない児童がいる。得意な児童も苦手な児童も誰もが力を付けていけるように、声かけや問い返し、ヒントの出し方などをさらに充実させていく必要がある。

意欲的に活動している児童への声かけや価値付けが後回しになってしまいがちだが、適切なタイミングで、適切な声かけや価値付けができるように工夫が必要だと感じた。

4 ICTの効果的な活用

教師によって使い方に幅があり、技量が十分でない者もいる。様々な使い方ができるよう研修を重ねていく必要がある。

これまで図画工作科において「造形的な見方・考え方を働かせ、形や色と豊かにかかわる資質・能力」を育成するために授業改善を行ってきた。少しずつではあるが、児童一人一人が自分らしさを追求し、粘り強く取り組む姿や、友達と意見を交換してもう一度考えて挑戦してみる様子などが見られるようになり、全体的に底上げされてきていることが感じられる。

また教師が児童の実態を踏まえて、様々な視点から単元や授業を計画することを繰り返すなかで、児童を見取る力や授業を構成する力がついてきたことも大きな成果だと考えている。それらは他教科や日常生活の指導にも役立つ力となっていることも実感している。

図画工作科での授業改善におけた様々な取り組みで身に付いた力を、教師も児童もともに十分活用し、学校生活全般においてさらに充実した学びを得られるように、これからも学校全体で取り組んでいきたい。